

大分県立看護科学大学第16回看護国際フォーラム

大学院修士課程におけるNP課程修了生の活動と成果

The outcomes and practice that of NP master's program education graduates

小野 美喜 Miki Ono

大分県立看護科学大学 専門看護学講座 成人・老年看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2015年10月20日投稿

要旨

2008年に日本で初めて大分県立看護科学大学の看護系大学院修士課程でNPコースが開講された。NPとは米国等で活動する Nurse Practitioner の略であり高度な実践力をもつ診療看護師である。日本では2014年に「特定行為に係る看護師の研修制度」が制度化され、特定行為研修を含むNP教育を受けた修了生が増えることが予想される。日本でのNP教育の歴史は浅く、その成果は明らかでないが、あらたな役割を担う活動に期待がもたれている。今回の報告は、介護老人保健施設に勤務するNP教育修了生に着目した調査結果をはじめ、病院や訪問看護ステーションでの修了生の活動によって見えてきた成果について述べる。修了生の活動は、患者のQOLの向上、満足度の向上等に効果がみられるほか、医療現場も効率的効果的となり、医療の質の向上につながることを期待される。

キーワード

NP、成果、プライマリケア領域、活動

Key words

nurse practitioner, outcome, primary care, activity

1. はじめに

2008年に大分県立看護科学大学の看護系大学院修士課程において、日本で初めてのNPコースが開講された。NPとは米国等で活動する Nurse practitioner の略であり高度な実践力をもつ診療看護師である。現在、NP教育を行っている大学院は7大学8課程であり、修了生は全国で約200名となった。大学院では日本NP教育大学院協議会による統一カリキュラムが展開され、大学院修了時にNP資格認定試験が課されるなど、修了生の質の担保が図られている。2014年6月に「特定行為に係る看護師の研修制度」が制度化され、2015年10月1日から施行となった。そのため、特定行為をカリキュラムに含んだNP教育を受けた修了生が今後増えてくることが予想される。

このようなNP修了生はどのような成果をあげ看護に貢献しうるのだろうか。米国では50年以上前からNP教育が実施され、NPの看護活動の成果が多方面で報告されている (Owens et al 2012, Stanik-Hutt et al 2013)。日本でのNP教育は始まったばかりである。しかし、「予め医師との間で作成された手順書をもとに、判断力や難易度の高い特定行為を行う」という、これまでの看

護の役割を拡大した活動に期待がもたれている。先に筆者は介護老人保健施設に勤務する修了生に着目して、高齢者やチームに現れた成果を報告した (Ono et al 2015, 十時 他 2015)。この調査結果をはじめ、所属する大分県立看護科学大学大学院NP養成コースで育成された修了生の活動の実際と活動によって見えてきた成果について述べる。

2. 大分県立看護科学大学NP教育修了生の活動

大分県立看護科学大学を修了した27名の活動場所を図1に示す。病院が最も多く、次に訪問看護ステーション、診療所の順である。修了生らは

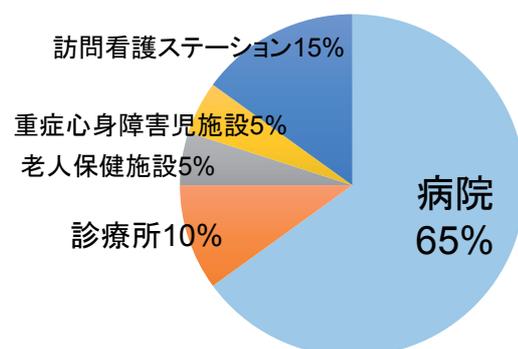


図1. 修了生の活動領域(大分県立看護科学大学の場合)

本格的な活動までに約1～2年の研修期間を設ける者や、ICU等で研修を行いながら将来的に離島でのプライマリケアを視野にしている者もいる。活動形態は雇用される施設によって異なるが、指導医の下で安全安楽な医療を行うために手順書に従って診療活動を行っている。今回は、活動領域としてはわずか1名であるが介護老人保健施設での活動成果を述べる。また主な活動領域として、病院、訪問看護ステーションをあげて、修了生の活動の実際を紹介する。

2.1 介護老人保健施設での活動背景

国で定められた介護老人保健施設の人員基準は、入所者が100名の場合、医師1名、看護師9名、介護士25名と規定されている。その他理学療法士、相談員、栄養士などの専門職がチームとして働いている。介護老人保健施設は医療と介護を提供する施設であり、高齢者の自宅復帰を目指す施設である。しかし、日本は超高齢社会であり、平均年齢は80歳代で、100歳を超える高齢者も多数入所している。認知症や慢性疾患を抱える高齢者や介護度が高い高齢者が多く、医療ケアニーズの高い高齢者の入所が増えているのが現状である。医師は一人常駐であるが、夜間は不在である。介護老人保健施設は、超高齢社会には重要な役割をもつ施設であるが、入所者に医療提供をするマンパワーは不足しているといえる。そこに、医学的知識をもって臨床推論を行い、特定行為が実施できる修了生の活動に期待がもたれる背景がある。

2.2 介護老人保健施設での活動と成果

介護老人保健施設で実際に活動するA修了生の活動は、日常的な入所者の健康管理によって悪化を予防することが主な役割となっている。定期的

な検査の他に、必要と判断した場合に臨時で検査を行い、その評価をする。また、入所者が急に状態が悪くなった時には緊急度と重症度の判断と対応をする。その際に対象者やご家族に何が起きているのかをわかりやすく説明しているのも修了生である。介護老人保健施設でよくみられる症例は、肺炎、転倒、意識障害などであり、高齢者に特徴的な病状の臨床推論が修了生の活動の中で多くみられる。また特定行為としては、皮膚トラブルの判断や軟膏の選択、処置、内服薬の調整、胃瘻膀胱瘻のカテーテル交換などである。

このような活動を通してA修了生が勤務する介護老人保健施設で得られた成果の一部を紹介する。入所中の高齢者の入院率をA修了生が活動する前後で比較した結果を図2に示す。A修了生が入所者に介入する前（平成20～22年）とNPとして介入した後（平成23～24年）を比較すると、介入後の入所者の入院割合が減少している。さらに入所者の救急車による搬送の件数を介入前後で比較した結果を図3に示す。A修了生の介入後は救急搬送数が介入前より半数以上減少している。このような結果が示された理由として、状態が悪化した高齢者に対して救急搬送の必要性が判断され、救急搬送が本当に必要なケースの見極めが強化されたのではないかと考えられる。また、入院割合も減少していることから入所者の日常的な健康管理が強化されたためと考えられる。これらは高齢者の健康への直接的な成果である。さらに一緒に働く看護師からは、「医師に聞きにくいことが気軽に聞ける」、「根拠を説明してくれるので自信が持てる」などと評価されており、高齢者や家族からは「よく診てもらえて嬉しい、心強い」などの安心の声があがっている。

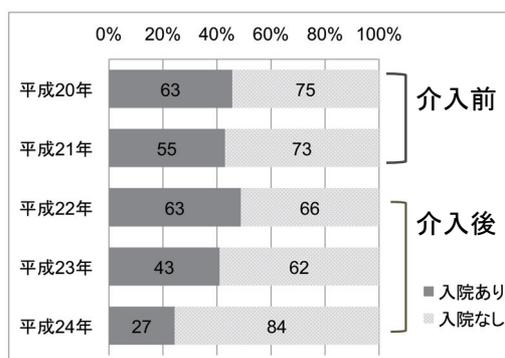


図2. 修了生介入前後の入所者の年間入院割合

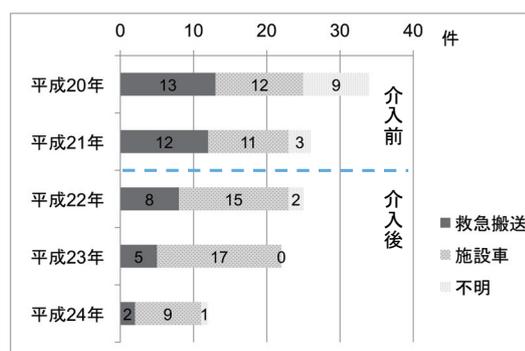


図3. 修了生介入前後の病院受診方法

これらは一事例が示す成果である。介護老人保健施設で働く修了生はまだ希少であり、その数を増やしていくことが課題である。これを受けて、今後、介護老人保健施設で多くのNP課程修了生が活動することで、高齢者の健康管理の強化、急変時の迅速な対応、チームでの多職種協働が円滑となることが期待される。

2.3 病院でのNPの活動

病院での活動例として地域の中核病院に勤務するB修了生の活動を述べる。B修了生は指導医が担当する患者の副担当として活動している。指導医が外来診療のために病棟を不在にする時には、病棟の入院患者を診察し、必要な患者に対して手順書を基に検査や薬剤の調整などを行っている。このような活動によって医師が不在の時でも入院患者の緊急時の対応や必要な検査処置を迅速に行うことができ、医師を待つために患者の処置が遅れることが減少している。病院で修了生がよく対応しているのが、食欲不振、頭痛、嘔吐、発熱、めまいなどの症状に対するものであり、修了生の臨床推論は患者の症状の原因を早期に発見し、対応するのに大変役立っている。また特定行為として動脈血採血、デブリドマン、胃瘻カテーテル交換、薬剤調整等を行っている。

2.4 訪問看護ステーションでの活動

訪問看護ステーションで活動するC修了生は、訪問患者のうち主に状態が悪化した在宅患者の診察、検査、処置にあたっている。このまま在宅で療養できるか、入院治療したほうがよいのか、という重要な判断を行っている。修了生の報告では、腸閉塞、肺炎、心不全、看取りなどのケースで判断を行う経験をしている。これまで自宅療養が難しく入院となっていたケースも、修了生が訪問看護ステーションで活動するようになってからは、自宅でも継続して治療を行うこともできているという。在宅で実施する特定行為としては、気管カニューレの交換、末梢動脈血採血、膀胱瘻、胃瘻カテーテル交換、褥創処置などが多数みられる。

また、修了生は患者さんのケアだけではなく、看護スタッフへのフィジカルアセスメントの研修なども開催し、全体的な看護のスキルアップに貢献している。

3. おわりに

今回、大分県立看護科学大学の修了生を中心とした活動と成果の一部を報告した。病院や訪問看護ステーションでの成果は、今後継続して明らかにする必要があり、今回報告した介護老人保健施設についても継続調査が必要である。プライマリケア領域だけでなくクリティカル領域も含め、NPの修了生が全国的に活動することで、患者のQOLの向上、満足度の向上等に効果がみられるほか、医療現場も効率的効果的な医療体制がとられ、医療の質の向上につながることを期待される。

引用文献

Ono M, Miyauchi S, Edzuki Y et al (2015). Japanese nurse practitioner practice and outcomes in a nursing home. *INR* 62(2), 275-279.

Owens D, Eby K, Burson S et al (2012). Primary palliative care clinic pilot project demonstrates benefits of a nurse practitioner-directed clinic providing primary and palliative care, *J Am Acad Nurse Pract*, 24, 52-58.

Stanik-Hutt J, Newhouse RP, White KM et al (2013). The Quality and effectiveness of care provided by nurse practitioners. *J Nurse Pract* 9(8), 492-500.

十時友紀, 小野美喜, 福田広美 他 (2015). 介護老人保健施設の事業対象看護師の導入により期待されるチームへの効果: 導入施設と非導入施設の困った体験の比較より. *コミュニティケア* 17(4), 67-71.



著者連絡先

〒870-1201

大分市大字廻栖野2944-9

大分県立看護科学大学 成人・老年看護学研究室

小野 美喜

ono@oita-nhs.ac.jp